

1 ジョン・ギルピンのおかしな物語

想定外の遠乗りと無事ご帰還の顛末記

- 1 善良な市民 ジョン・ギルピン
信頼厚く誉れも高い
加えて 名高いロンドンの
義勇軍の大將だった
- 2 ジョン・ギルピンの女房が言った 5
わたしたちときたら 結婚このかた
平々凡々の二十年が過ぎたけど
一日の休みもなかったわ
- 3 明日は結婚記念日よ 10
エドモントンのベル亭で
お祝いとしゃれこみましょう
二頭立ての馬車をしつらえて
- 4 妹とその子ども 15
わたしと三人の子どもたちで
馬車はいっぱい だからおまえさん
馬で後^{あと}からついてきて
- 5 間髪入れずギルピン^{こた}応えた 20
女のなかで尊敬するのは
たったひとり わが最愛の女房どの
何でもおまえの言う通り
- 6 我こそは世間様にも名の知れた
太っ腹の生地商人
親友の生地加工屋が
馬を貸してくれるだろうよ
- 7 ギルピンの女房が言うことには まあよかった 25
ベル亭のワインは高いから
自家製ワインを持参しましょ
色も澄み具合も負けやしないわ

- 8 ジョン・ギルピンは大喜び
愛する女房にキスをした 30
お楽しみを思いついても
儉約を忘れぬ賢夫人
- 9 その日となって 馬車が来た
でも 戸口の真ん前には 35
横付けならぬと女房のお達し
お高くとまってるると陰口たたかれぬように
- 10 三軒先に馬車は止まり
そこで全員乗り込む手はず
六人のご一行は上を下への大さわぎ
我先にと馬車をめがけて突進した 40
- 11 ムチはピシピシ 車輪はガラガラ
一行はいつにないはしゃぎよう
車輪の下で石ころゴロゴロ
チーフサイド通りはお祭りのよう
- 12 借りた馬の脇でジョン・ギルピン 45
豊かなたてがみをはっしと掴み
大急ぎで飛び乗ったが
すぐに馬から降りるはめ
- 13 鞍に手をかけ
いざ旅立ちというときに 50
ふと振り返ると
三人のお客の姿
- 14 馬から降りて商売商売
時間のロスはたしかに残念
でも 儲けのロスは 55
ギルピンにはもっと耐え難い
- 15 あれやこれやと品定め
三人の客は手間取った
そのとき 女中のベティが二階から降りてきて
「ワインをお忘れですよ」 60

- 16 よし わかった 持って来てくれ
革のベルトも一緒にな
義勇団の軍事教練で
自慢の剣を吊るすあのベルト
- 17 万事行き届いたギルピンの女房 65
石のボトル二本を揃え
お気に入りのワインを入れて
厳重に保管していた
- 18 それぞれボトルには円い把手^{まる}が^{とって}付いていた 70
ギルピンはそこにベルトを通して
ボトルを両脇にぶら下げると
左右のバランスみごとにとれた
- 19 それから 頭から爪先まで
精一杯着飾ろうと
丁寧にブラシのかかった赤いロングコートを 75
さっと勇ましく羽織った
- 20 再びジョン・ギルピンは
駿馬に飛び乗り
石ころ道をそろりそろりと
たいそう用心して進んでいった 80
- 21 蹄鉄で護られた足の下
道はなめらかと判るやいなや
馬は鼻息荒く駆け出して
鞍にまたがるギルピンの尻はヒリヒリ
- 22 ギルピンは叫んだ どうどう 落ち着け 85
だが 叫んでも無駄だった
駆足はじきに全速力
轡^{くつわ}も手綱も役たたず
- 23 致し方なく前傾姿勢
まっすぐ坐ってはいられない 90
両手でたてがみをはっしと掴み
落っこちないよう一所懸命
- 24 馬にすれば初めてのこと

- 轡^{くつわ}も手綱も 今まで引かれたことはない
背中に何を乗せていたかと 95
ますますびっくりするばかり
- 25 ギルピンはやけっぱちで駆けていく
帽子も鬘^{かつら}も飛んでいく
家を出る時には夢思わず
とんだ珍事にやけのやんぱち 100
- 26 風が吹きつけ コートははためき
ギルピンはまるで赤いロングの吹流し
ボタンとボタン掛けがとれ
ついにコートは飛んでった
- 27 人々に見えたのは 105
腰にぶら下げた二本のボトル
両脇でボトルはブラブラ
野次馬はやんやの喝采
- 28 犬が吠え 子どもが叫び
窓という窓が開かれた 110
野次馬は口々に あっぱれ おみごと
大声で喚きたてた
- 29 ギルピンはどンドン駆けてゆく
評判がすぐに広まった
競馬だぜ しかもハンデ戦だによ
掛け金は千ポンド 115
- 30 ギルピンが全速力で近づくと
通行料取り立て人らは
一瞬にしてみごとな早技
ゲートを広々と開け放った 120
- 31 前傾姿勢で通り抜け
下げた頭から湯気が立つ
ギルピンの尻のあたりで
二本のボトルはぶつかり合って大破した
- 32 ワインは道に流れ出し 125
見るも哀れや もったいなしや

- 馬の脇腹を流れて湯気を立て
馬にバターを塗ったかのよう
- 33 でもまだ ハンデ戦競馬の真っ最中
革のベルトははずれちゃいない 130
野次馬に見えるのはボトルの首
腰でブラブラ揺れている
- 34 ギルピンは馬乗り曲芸を披露して
賑やかなイズリントンを駆け抜けて
ついに きれいなエドモントンの 135
ウォッシュの沼にドボンした
ウオッシュの沼にドボンした
- 35 エドモントンの道の両側に
ギルピンは泥水を跳ね飛ばした
柄を持ってクルクル回せば水滴飛び散るモップのよう
はたまた 泥水飛ばす野ガモのよう 140
- 36 エドモントンでは 最愛の女房が
ベル亭のバルコニーから見下すと
驚いたことに 優しい亭主が
競馬さながら駆けてくる
- 37 生まれ 生まれ ジョン・ギルピン ここがベル亭 145
みなでいっせいに叫んだ
食事はできてる 待ちくたびれたわ
ギルピンが言った おれだって腹ぺこだ
- 38 だが馬は いっこうに
止まる気配なし 150
何故かって 馬の主人がいるのは
十マイル先のウェアだから
- 39 ギルピンは矢のように速く駆け抜けた
まるで屈強の射手が放った矢
ギルピンは駆け抜けた 155
ここらがちょうど話の真ん中
- 40 ギルピンは息急き切ってどンドン駆けた
止まりたいが止まらない
親友の生地加工屋の家まで行って

- ようやく馬は一休み 160
- 41 おかしな格好のギルピンに
加工屋はびっくり仰天
パイプを置いて門へ駆けより
ギルピンに話しかけた
- 42 どうした どうした 165
これは一体 どういう訳だい
どうして鬘かつらがないんだい
なぜここへ来たんだい
- 43 ギルピンは頓智の持ち主で
時を得たジョークがお得意だった 170
陽気な風を装って
加工屋にこう言った
- 44 馬が行きたいって言うからさ
おそらくきっと
帽子も鬘かつらも間もなく到着 175
今 ここに向かっているとところだよ
- 45 友人ジョン・ギルピンの上機嫌に
加工屋は喜んで
一言も言い返さずに
家の中へ入っていった 180
- 46 加工屋は帽子と鬘かつらを持って来た
鬘かつらは後ろの毛がふっさふさ
帽子も被るに悪くはない
それぞれ仕立てはよいものだった
- 47 加工屋は帽子と鬘かつらを持ち上げて 185
今度は彼が頓智をお披露目
おれの頭はおまえの二倍
だから小さくしなけりやな
- 48 だがまずは おまえの顔に付いている
泥ハネを拭いてやろう 190
馬を休ませ腹ごしらえだ
腹が減っては戦はできめえ

- 49 ギルピンが言うには 今日はおれの結婚記念日
世間さまが胡散臭そうに見るだろよ
女房はエドモントンで食事して 195
亭主はウェアで食事など
- 50 馬にむかってこう言った
ベル亭へ急がにやならん
おまえに付き合ってここまで来たんだ
今度はおれに付き合ってくれる番 200
- 51 ああ 言うも不運 見栄もこれまで
またまた ギルピンには手痛い報い
しゃべっているうち やかましい口バが
おおきな声でいなないたのだ
- 52 すると馬もいなないた 205
まるでライオンの雄叫びを聞いたかのよう
力いっぱい全速力で駆け出した
ここへやって来た時さながらに
- 53 ギルピンはどんどん駆けていき
借りた帽子もかつらも 210
来たときよりも早く吹っ飛んだ
なぜって 大きすぎたから
- 54 さて一方 ギルピンの女房は
亭主が遥か遠くへと
駆け去ったのにびっくり仰天 215
半クラウン硬貨を取り出した
- 55 ベル亭まで馬車を駆ってきた
若い御者に言いつけた
これはあなたへの心付け
亭主を無事に連れ戻してちょうだい 220
- 56 御者が馬を駆ってしばらくいくと
ギルピンが全速力で戻ってきた
すぐさま亭主を止めようと
ギルピンの馬の手綱を引っ掴んだ

- 57 うまくいったと思いきや 225
手綱は御者の手をすり抜けた
馬はますますびっくり仰天
もっと速く駆け出した
- 58 ギルピンはどンドン駆けていき 230
御者も後を追いかける
御者の馬も大喜び
ゴロゴロひっぱる車輪はなくて気楽な身分
- 59 六人の紳士たちが道端で見たのは 235
飛ぶように駆けていくジョン・ギルピン
その後を追っていく若い御者
六人はやんやの大喝采
- 60 止まれ盗人^{ぬすっと} 止まれ盗人^{ぬすっと} 追剥ぎめ 240
みな口々にわめきたて
通行人も我れ先にと
いっしょになって競馬した
- 61 またもや料金所のゲートが
さっと大きく開けられた
今度も取り立て人たちは
ギルピンは競馬の最中と勘違い
- 62 ギルピンはどンドン駆けて 競馬に勝った 245
一番乗りで町に到着
馬に乗ったその場所でようやく止まり
乗った場所でまた降りた
- 63 さあ うたおう 王様万歳 250
ギルピン万歳
ギルピンが次に遠乗りするときも
また彼の競馬を見たいもの

(中島久代訳)